医療最前線
>>>vol.90

川崎医科大学附属病院
脳神経外科

Report!

開頭手術と血管内治療の「二刀流」で、最適な治療を提供。

専門の医師が脳卒中も二四時間体制で診療

川崎医科大学附属病院の脳神経外科では、脳卒中と脳腫瘍を中心に、機能的疾患や外傷などに対する外科的治療も幅広く行なっている。また、救急搬送されてくる脳卒中患者に正しい診断と十分な治療が行なえるように脳卒中診療の専門の医師らが二四時間体制で診療している。

脳卒中は脳血管障害ともいわれ、血管が詰まる脳梗塞と、細かな血管が破れて血液が漏れ出る脳出血、血管にできたこぶ（脳動脈瘤）が破れて脳のしわの間（くも膜下腔）に血液が充満するくも膜下出血の三つに大きく分かれる。「当科では、開頭手術や血管内治療を行なっています。また、脳卒中には内科やリハビリテーション科が大きく関わってきますので、密に連携を取りながら治療を進めています」。そう話すのは、同科を率いる菱川教授。教授が多職種連携とともに重視しているのが、開頭手術と血管内治療専門の資格を併せ持つ「二刀流術者」による適切な治療。たとえば、くも膜下出血予防のために破裂前の脳動脈瘤を治療する場合。マイクロカテーテルという極細の管を用いる血管内治療は頭を開かないので体への負担は少ないが、金属や造影剤のアレルギーがあれば行なえず、血管の状態や動脈瘤の形によっては適さない。

いっぽう、頭皮や頭蓋骨を切り開く開頭手術は体への負担は大きいが、血液が入らないよう脳動脈瘤をクリップで挟むため、より根治性は高い。それぞれにメリット・デメリットがあるため、「ひとりの医師が両方に精通していると、偏りのない説明をしたうえで、その患者さんにとって適切な治療を提案でき、患者さんは公平な立場で判断できます」と菱川教授。実際、同科では複数の「二刀流術者」が診療にあたっている。

その筆頭である菱川教授が注力しているのが難病指定されている「もやもや病」。目の奥の太い血管が詰まって細くなり、それを補うために発達した脳の深い部分の細い血管が、煙のようにもやもやと見えることから名付けられた。「脳の血液不足から一過性の麻痺や言語障害などの症状が起こり、脳梗塞や脳出血を発症することもあります。原因は不明で、乳幼児から壮年期まで幅広い年齢で発症します。今後当科でも診療を拡充したいと考えています」と厚生労働省のもやもや病に関する研究班にも属している菱川教授は話す。

「当院は大学病院なので、日常診療の充実はもちろん、医学の進歩に貢献する研究も大事。バランスの取れた『二刀流』の医師の育成も目指しています」と力強く語ってくれた。

毎朝のカンファレンスでは、3科の医師および看護師そして理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ケースワーカーなどが集い、入院患者について情報を共有している。「脳卒中の治療では、他科、多職種といかにチームワークよく、まとまってやっていくかが大切」と菱川教授。

Neurosurgery

狭くなった頸動脈を内側から広げるために、太ももの付け根の血管からカテーテルを入れて行なう「ステント留置術」は血管内治療のひとつ。機器の発展も目覚ましく、今注目されている分野である。

もやもや病における脳虚血発作の治療では血流を増やすために頭皮と脳の血管をつないだり、脳をおおう血流豊富な硬膜を脳の表面にくっつけるバイパス手術がスタンダード。バイパス手術は、非常に高度な技術が必要となる。

常に心がけているのは、常識的な判断ができる医師であること。プライベートでは、自然豊かな場所に遊びに行くなど、できる限り家族との時間を大切にしています。最近は、息子が自転車に乗り始めたので、一緒に走ったりもしています。

菱川 朋人 教授
Hishikawa Tomohito

■ 専門医
日本脳神経外科学会認定脳神経外科専門医、日本脳神経血管内治療学会脳血管内治療専門医

お問合せ
川崎医科大学附属病院
倉敷市松島577
☎086-462-1111
https://h.kawasaki-m.ac.jp

※写真は取材用に撮影したものです

■2024年2月25日号掲載　本文中の医学情報、写真は掲載当時のものです。